



●言葉を発する際に必要な「慎重さ」と「覚悟」

読んだり、聴いたりした言葉の中で、ときに、
読んでも永く心に残るものがあります。その後の自
分自身の考え方や生き方に、明らかに影響を与えたと
思える言葉のことで。また、長い間、医療や教育の
世界で働いていると、自分自身の発した何気ないよ
うな言葉が、学生や患者の心の中に永く残っていて、学
生の生き方や患者の心の安定にプラスの影響を与えて
いたということ、後で知ることもあります。「何気
ないような」と書きましたが、多分、その状況にとて
もふさわしい言葉が、ごく自然に溢れた場面なのだろ
うと思います。もちろん言葉には、状況に応じて、プ
ラスの影響だけでなく、マイナスの影響もあり得るわ
けで、言葉を発する際には、それだけの慎重さと覚悟
のようなものが必要になってきます。今回は、この人
間の創り出した「言葉」について、中でも特に「言葉
の力」について、頭に浮かぶことを語ってみたいと思
います。

●ヒトと類人猿の進化を分けたもの

世界各地に、人類の起源を語った神話があります。
世 中国の神話では、女神が泥から人間をつくった
とあります。また、キリスト教徒が「旧約聖書」と呼
ぶユダヤ教の聖典では、神が土の塵からアダムという
男を創り、アダムの肋骨からイブと呼ばれる女が創ら
れたことになっています。しかし、19世紀の英国の
学者ダーウィンを創始とする進化論が、これを大きく
書き換えてしまいました。進化の歴史が教えるところ
によれば、人間(ヒト)はチンパンジーとの共通祖
先から分岐したのであり、それはいまから600万年前
といわれています。科学技術による裏付けも集積さ
れてきました。その後、チンパンジーをはじめとする
大型類人猿の仲間は衰退し、いまでは絶滅危惧種
となっています。しかし、ヒトのほうは世界中に分
布し、増える一方で、いまや人口は67億人を超えて
います。この違いはどこから生じたのでしょうか?

ヒトが直立二本足歩行できるようになり、手が自
由に使えるようになり、大脳皮質が発達して、文化
を持ったからであると考えられています。現在の私た
ちと同じ種であるホモ・サピエンスが出現し、アフリ
カを出たのが20万年前で、洞窟絵画などの芸術が見
られるようになるのは、およそ5万年前からのこと
です。絵画から象形文字が生まれます。ヒトの文化の定
義はさまざまですが、イメージやアイデアを共有でき
ることが、大きな特徴の一つとなっています。この
共有は、言葉(言語)を介して行われます。そして、
ホモ・サピエンスは、その言葉の意味のとおり「考え
るヒト」として、言葉を駆使して科学と科学技術を発
展させて、現在の人類の繁栄が生まれたことになりま

す。

地球上の動物の中で、多分、人間だけがイメージや
アイデアを、言葉を介して共有できるのだと考えられ
ます。「わたし」が「外界の事物」に対して抱いた心
の動きや考えを、言葉を介して「あなた」に伝えて、「あ
なた」が「外界の事物」に対して「わたし」と同じよ
うな心の動きや考えを抱くことによって、イメージや
アイデアを共有することができること。逆に、「あなた」
が「外界の事物」に対して抱いた心の動きや考え
を、言葉を介して「わたし」も共有できること。また、
共有できたことを、言葉を介してお互いが理解できる
こと。つまり、イメージやアイデアに関するコミュニ
ケーション能力が、人間では高度に発達しているとい
うことなのです。

人間の特徴としては、「直立二本足歩行」と「言葉」
の発達のほかに、「笑う」ことができるということも
重要です。つまり、顔面の表情筋がよく発達している
ことも、高度なコミュニケーションにとって有利な条
件になっています。そこで、人間らしく生きることを
望むのであれば、このような人間にのみ与えられた特
徴を、十分に生かすような生き方が重要になってくる
ことが分かります。

●言葉に宿る「魂」

さて、「はじめに言葉ありき、言葉は神と共にあ
りき、言葉は神であった」(新約聖書のヨハネ
による福音書)という有名な言葉があります。創世は
神の言葉(ロゴス)から始まり、言葉はすなわち神で
あり、この世界の根源に神が存在するという意味です
が、日本文化のなかでいわれている「言霊(ことだま)」

と共通した部分があります。言霊とは、「言葉には魂
が宿る」という考えです。

筆者は、断りがたい筋から依頼されて10年あまり
前から、産業界として毎月1回、大分県庁職員のスト
レス健康相談のお手伝いをしています。ストレスでダ
ウンして休職中の職員の復職の支援です。相談に来ら
れたクライアントの方が、自分で心の整理をするので
すが、そのお手伝いをしているわけです。「聴くは効
くに通ず!」ということで、毎回、まず話を聴くと
ころから始まるのですが、話を聴いているうちに自然
に頭に浮かんできた言葉を、自然に語るようにして
います。ストレスでダウンしたことを、決してマイ
ナスとしてだけで捉えるのではなく、その経験から
プラスを引っ張り出してほしいと、祈るような気
持ちで対応しています。相手と状況によって、浮かん
でくる言葉はさまざまなのですが、人間と人間の出会
いそのものであり、まさにライブ感覚の真剣勝負です。
クライアントの方が、ある言葉をきっかけにして立ち
直っていくことを見るにつけ、言葉の威力をいつも感
じています。

最後になりましたが、「真理は円形にあらず、楕円
形である」という内村鑑三の残した筆者の好きな言葉
があります。円は中心が一つですが、楕円形には中心
が二つあります。この世の中のことは、特に人間の
営みは、数学的に割り切れないことがほとんど
です。中心が一つしかない、という考えからは争
いが生まれます。しかし、現実と理想、現状維持
と現状打破(改革)、といったように二つの中心
で物事を考えることによって、調和を維持しなが
ら現状から発展させていくという「懐の深い生き
方」が可能になるのではないのでしょうか。



なかの・しげゆき 岡山大学医学部
卒。大分医科大学臨床薬理学教授、同
附属病院臨床薬理センター長、大分大
学医学部附属病院院長、大分大学学長補
佐などを歴任。大分大学名誉教授。大
分大学医学部創薬育薬医学教授、国際
医療福祉大学大学院教授を経て現職。
日本臨床薬理学会名誉会員(元理事長)、
日本臨床精神神経薬理学会名誉会員(元
会長)、日本学術会議連携委員、日本心
身医学会認定医・指導医、日本臨床薬
理学会専門医・指導医、日本内科学会認定医、CRC 連絡協議会
代表世話人。響き合いネットワーク連絡協議会理事長として、医
療コミュニケーションを学ぶ全国的なワークショップ(大分、岡
山、東京、長崎、山形、湯布院)の企画・運営に携わっている。